

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「こころゆたかに、すこやかに」の理念に基づき、心が豊かになれるよう、施設内だけにとどまらず、散歩などを取り入れ、地域の方と挨拶を交わす事に始まり、理念と地域密着ということを活かした取り組みを行っている。	施設の理念に基づき職員一同で『和』という目標を考え、フロアに掲示している。平和、和やかになどいろいろな意味をこの『和』という目標に付け足していくことで、自分達のケアを行うことができるよう毎月の会議や申し送りで確認している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日常に散歩や買い物などに出かけ、地域の人達と挨拶を交わしたり、話をしたりしている。また、畑の作物や花の差し入れや話し相手に来られる方もいる。もちろん、保育園や学校の行事にも参加している。	散歩をしたり、近所のスーパーや花屋さんで買い物に行った際、地域の人と会話を楽しんでいる。保育園や学校行事への参加したり、施設の夏祭りに地域住民が参加するなど交流を図っている。	事業所としての大きな集まりの中でなかなか地区との交流は難しいと思われるが、地域住民が福祉へ目を向けるきっかけ作りをして頂くことを期待しています。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	実習生の受け入れを行っている。また、夏祭りや秋祭り等の、地域交流の場を提供している。そのほか、忘年会などの行事にも地域の方に参加して頂いている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	施設の活動状況や利用者状況などを主に連絡報告をし、意見をもらっている。また、利用者からの苦情などを参考にしている。利用者の家族からの入所に至った経緯や入所してからの思いなども訊かせて頂き参考にしている。	2ヶ月に1回、定期的に開催している。参加者は地域包括支援センター、民生委員、利用者、家族、職員、施設長などである。以前は会議室で開催していたが、参加者の提案により現在利用者のいるフロアで開催しており、利用者の生活がより身近に感じられるようになったと話される。	運営推進会議の参加者が固定化している傾向がある。今後地域への働きかけを深めていくためにも、地元の小、中学校の先生や町内会長、老人会の方など参加者を増やし、活発な意見交換を期待します。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進を通しての連絡を行っている。	地域包括支援センターが同じ敷地内にあるため、地域の情報交換がしやすいと同時に、疑問点があればすぐに相談することができる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束についてのマニュアルを作り、ケアカンファレンスなどで、どうすれば身体拘束を回避した対応が出来るかを話し合っている。	身体拘束をしないケアを基本としている。一人一人の行動や生活パターンを把握し、常時見守りを行っている。転倒等のリスクを少なくするため、ベッドの高さを変えたり、布団を敷くなどの対応をカンファレンスで話し合っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	利用者へのケアに影響しない様に、職員のストレスを少なくする為に、管理者に業務改善の相談が出来るように努めている。虐待などがニュースで取り上げられた時には会議で取り上げ、意識を高めるようにしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	全員が研修に参加する事は難しいが、年間に数名は研修に行き、理解を深めている。成年後見が必要なケースでは、会議などを通じて制度の周知を改めて行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	時間をとって丁寧に説明している。看取りや医療連携などについては詳しく説明を行い、同意を得るようにしている。また、介護報酬の改訂などに伴い、利用料が増加する場合や諸物価の変動などに伴う利用料の値上げを行う場合は、資料を作り、個別に説明を行い、疑問や不安について十分な説明を行い、理解や納得が得られるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者とは交換日記を行ったり、個別で買い物などに出かけたりし、意見を言ってもらえる環境を作っている。また、家族にはケアプラン作成時などに意見・要望の聞き取りを行い、来園時や電話で利用者の近況を報告して、思いや意見を聞くように努めている。意見や苦情を言うことで、退所して欲しいなどと言うことはないなどを伝え、消極的にならないように努める。	耳が聞こえづらい利用者には字が書けることを活かして交換日記を行うなど、利用者の思いを知ることができるよう努めている。家族には利用者の近況を報告し、意見を伺っている。できるだけ家族の思いに添えるよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員からの提案に関しては、前向きに話し合いをする姿勢を示し、否定をすることより肯定するように努めている。	管理者と職員のいい関係が出来ており、意見や提案を言い易い雰囲気を感じられる。利用者に対してその都度話し合いながら、みんなで良くしてゆこうという思いが伝わってくる。また、職員はそれぞれ自分の得意分野を活かし、楽しんで介護を行っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、職場環境の整備に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員からの要望や質問の回答として、内部研修を行ったり、外部に研修に出かけてもらったりしている。また、日々の業務の中で、職員の行動に対し、必要であれば周りの職員も巻き込み、一緒に考えるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	研修に行くことで、ネットワークが作れるようにしている。職員からの希望があれば、他施設との交流が持てる環境を用意している。また、交流を持つよう誘いかけている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面接を必ず行い、ご本人と話をを行うようにしている。その中で、心身の状態や求めている不安などを聞くようにしている。必要であれば、家族の同意を求め、席を外してもらうなどして、話しやすい環境を作っているようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	困っていることや不安な事についてはどんな些細な事でも相談を受けて、一緒に前向きな検討をする姿勢を見せる。また、話をしてくれたことに対しては、出来るだけ回答を直ぐに出すように努め、出来るだけ早く結果を出すようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族が遠方におられる方に対しても、何度か電話で連絡を取り、病院や他施設などにおられても、何度か面会に行き、本人の状態を確認した上で、再度電話で連絡を取り、何が必要か意見を出し合い、サービスにつなげる。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	料理を一緒に作るなどしている。また、調子の悪そうな職員を見つけると、心配して声をかけてくれたりする事もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日帰り旅行などの際には、家族にも声をかけて参加してもらうようにしている。また、遠方の家族でなかなか参加できない方については、可能であれば、目的地をその家族の生活エリアに近いところに設定して、参加してもらっている。また、定期通院などを、家族と行ってくれたり、付き添ったりして、本人を支えていくための協力関係を築けることが多くなっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの人が訪問しやすい環境を作っている。また、お彼岸などの時には墓参りに行っている方もおられる。家族を通じて、知り合いに訪問してもらっている。	家族の面会が多く、1日中利用者の居室で過ごされる家族もおられる。ドライブで自宅付近に訪れたり、行きつけの美容院を利用している方もおられる。また、同敷地内の施設に知人と行き来できるよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	関係が良好に進むように、職員が間に入って円滑になるようにしている。また、気の合う者同士で過ごせる場面を提供している。(特に外出の際)。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	移り住む先の関係者に対して、本人についての情報やケアの工夫、本人がどのようにして今にいたるかなどを伝え、連携が図れるようにしている。また、入院などにより退去した場合でも、お見舞いに通い、相談や困っていることがあれば協力できるようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の変りの中ですべてを掛けて把握に努めている。また、家族や関係者から情報を得るようにしている。そして、本人にとって何が必要かを話し合い、ケアプランなどに反映させている。	管理者より、利用者の生活感を味わうことが楽しいという言葉があり、とても新鮮に感じた。この言葉通り、職員も利用者一人一人を大切に考えることで、言葉にならない思いを感じ、寄り添う関係ができていく。家族に対しても一方的ではなく、お互いに利用者に対する思いを伝えあい、一緒に考えていく関係が築けるよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人を始め、家族や関係者に継続的にバックグラウンドを聞くようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者のちょっとした状態の変化について、たまたまだろうではなく、もしかしたらという視点で、記録に載せ、報告・連絡相談をして把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプラン作成時には、家族や関係者と連絡を取り合い、意見や要望を聞くようにしている。プランを実行する事で、利用者の生活が豊かになるよう、家族や関係者の意見や要望も交えて、職員全員で意見交換やモニタリング、カンファレンスを行っている。	担当者が「できること、できないことシート」を利用し、利用者の状態を把握し、できることを維持したり、増やすことができるようなプラン作成を心がけている。また、皆で納得しないと実施に繋がらないと話され、プラン作成時には関係者全員から意見を聞くようにしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員の気づきや利用者の状態変化は、個々のケア記録に記載し、職員間の情報提供を徹底している。また、個別のケア目標を記録するシートを作っており、それを基に介護計画の見直し、評価を実施している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の要望に合わせて、今まで通っていた病院への受診や本人の思い出の地へ日帰り旅行など、可能な限り実現できるように努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議を行うことで、民生委員を始め、人的ネットワーク組織の構築を行っている。また、理学療法士との連携を図り、リハビリなどについて指導してもらい、利用者に反映させている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人のかかりつけ医や希望の病院へ受診している。また、状態によっては複数の病院を受診して、本人や家族が納得して適切な医療を受けられるように支援している。	本人希望のかかりつけ医に受診出来るよう支援している。週1回、訪問看護が来園し、健康管理や相談を行っている。少しでも異変があれば、夜間でも訪問看護に相談できる体制が整えられている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問介護ステーションとの連携を図り、日頃の健康管理や医療面での相談・助言・対応を行ってもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	施設として、どのような状態であれば対応可能なことを医師と家族に伝え、出来るだけ三者で話し合いが出来るようにしている。また、出来るだけ頻繁に見舞うようにし、家族とも回復状況などの情報交換をしながら、早期退院できるようにしている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	施設側の出来る最大のケアについて説明を行い、本人や、家族の意思を踏まえ、医師と家族と職員が連携を取り、安心して納得のいく最後を迎えられるように、随時意思を確認しながら取り組んでいる。	入居時に終末期対応について説明をするが、利用者が元気な状態の中で、家族も想像しづらい面がある。重度化した時には、医師、家族、職員間で話し合い、随時家族の意思を確認しながら、施設のできる最大のケアを行っている。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	夜間の緊急対応についてのマニュアルを作成している。また、講師を招き、救命講習を実施している。そして、急変が考えられる利用者については、その本人の状態に合わせた応急処置や対応について、医師や看護師より指示を仰いで、全職員で周知徹底している。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	マニュアルを作成し、年2回の消防訓練を行っているが、必要に応じて回数が増えることもある。また、消火器や避難経路の確保などの設備点検も定期的に行っている。	年2回避難訓練を行っている。同法人の職員にも手伝ってもらい、実際に利用者を外まで避難できるように訓練をしている。	避難訓練実施について、地域の方にもお知らせし、参加して頂くなど、協力関係を築いて頂くよう期待します。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	制服を作ることもなく、常に私服で勤務しており、急な外出の際にも、職員と利用者で見られない様に努めている。声かけについては、定期的に会議で話し合う場を設けたり、相互に注意を行い、常に意識できるようにしている。	居室へ入るときには必ず利用者に確認している。また、居室の扉は曇りガラスがあり、プライバシーを確保しながら、さりげなく見守ることができるよう配慮されている。排泄介助等は他の利用者に聞こえないようにするなど、特に注意をしている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	意思表示できる方には、必ず選択してもらうようにしている。意思表示できない方には、食べ物一つにしても色々な物を摂取してもらい、表情などで読み取ろうと努めている。また、家族や関係者に聞き取りを行い、判断する材料にしている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な一日の流れは各自あるが、いつもと違う余暇に誘ってみたり、「天気が良いから〇〇に行きたい」と希望が出れば、出来るだけ可能にするようにしている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	着替え全般において、基本的には本人に選んでもらっている。また、フェイスシェイバーで顔剃りをしたり、外出時には化粧をしたりしてもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	刻み食の人の食事は、普通食の形で出して見てもらい、その後刻むようにしている。頂いた野菜を使って料理を作ったり、食べる楽しみに繋げている。食事の際は、職員も利用者も一緒にテーブルを囲んで食べるようにしている。	訪問した日がひな祭りだったので、菱餅やお雛様をかたどったお寿司や果物など目で楽しむことができ、利用者もとても楽しそうに食べられていた。ゴマをする、卵をかき混ぜるなど利用者に出る調理作業を手伝ってもらったり、逆に調理方法を教えてもらったりしながら毎日の食事を和気あいあいと楽しまれている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事は個別に確認し、チェック表に記入している。嗜好も理解しており、メニューを見て食べなさそうであると、同じ食材で別の物を作って提供するようにしている。食事がなかなか進まない方に対しては、声かけや介助だけでなく、本人の好む形を探して、形を変えて提供するなど工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自分で出来る方は声かけ見守りをし、出来ない方については、職員が介助を行うようにしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を利用して、尿意のない利用者に対しても時間を見計らって誘導することで、トイレにて排泄できるように支援している。紙パンツやパット類については、本人に合わせて検討している。	利用者の状態に合わせて、家や病院では出来なかったケアをしていきたいという気持ちで支援している。なるべく起きてる時は布パンツで過ごしてもらおうなど、本人が快適に過ごせるよう臨機応変に対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘の方には水分を多めに摂ってもらったり、運動をしてもらったりして、便秘改善に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	夜間に入浴したい方は夜間に、皆が入った後にゆっくり入りたい方は、最後に入ってもらおうなど、個々のニーズに合わせて入浴してもらっている。また、入浴剤を入れたい方は使用してもらっている。そして、入浴を拒否される方については、どうすれば入って頂けるかを検討し、工夫して入浴してもらっている。	本人の希望する好きな時間に入浴してもらおうようにしている。拒否される利用者にも声かけを工夫して入ってもらおうようにしている。リフト浴を設置しており、浴槽の出入りが困難な利用者も安全に入浴できるよう整備されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝に向けてリズムが安定するよう工夫している。また、寝付けない時には添い寝をしたり、温かい飲み物を飲んでもらったりしている。そして、家族や医師と相談して、眠剤の調整を行い、日中の活動に支障をきたさないようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方箋をファイルして、職員が内容を把握できるようにしている。また、副作用に注意して、副作用によって起こる症状を理解し、医師に相談を行う時もある。服薬の際には、利用者の名前と時間帯を声に出して読んでから手渡し、服薬をしてもらっている。それにより、他の職員も確認できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	花を生けてもらったり、食事の下ごしらえや植物の世話など、それぞれの経験を活かせる場面を作っている。日帰り旅行などの際には、行き先を利用者と決めるようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日々の生活の中では、毎日の買い物に同行してもらい、そのついでに喫茶店に行ったり、公園に散歩に出かけたり、墓参りに行ったり、昔から定期的にお参りに行っている神様を拝みに行くなど、利用者の希望をなるべく取り入れるよう支援している。また、年に何度も日帰り旅行を行っており、利用者の行きたい所や見たい物を聞きだし、外出している。また、生まれ育った所を訪れて案内してもらったりしている。	日常生活の中で、毎日一緒に食材を買い出しに行ったり、花屋さんへ行ったり、プランターに水やりをしたり、近所を散歩するなど利用者の希望に添って行っている。訪問中にも「行ってきます」とシルバーカーを押して買い物に行かれた利用者や職員の姿がとてもさりげなく、自然であり、義務感や大変さを感じさせない明るさ、楽しさを感じ、素晴らしいと思った。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自分で管理できる人は、自由に使ってもらっている。管理できない人は、外出時など金銭授受が行われている場面で財布を渡し、支払いをしてもらうようにしている。それすら難しい方に関しては、職員と支払いをするようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話を掛けたい時には掛けられるようにしている。電話番号を覚えておけない方に関しては、本人と家族の了解を得て、職員の方で把握しており、いつでも掛けられるようにしている。また、耳の遠い方で受話器から聞き取れない方には、スピーカーホーンを利用したり、職員が聞き入り伝えたりしている。手紙は字が書ける方には知り合いに出してみよう等、職員から誘いかけたりしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花を生けてもらったり、飾り物やカレンダーは、どこに飾るか一緒に決めたりして、自分たちの空間である事を意識してもらえるようにしている。	1階、2階で間取りが全く違っているが、それぞれの良さを感じた。生花やお雛様が飾られており、季節感を感じる事ができる。壁には職員がコメントを加えた賑やかな写真や利用者の作品を飾り、誰もが楽しむことができる。臭いや衛生面はいつも注意している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テレビを離れる空間や外が眺められる長椅子を配置するなどして、思い思いに過ごしてもらえるようにしている。また、テーブルも1つのテーブルにせず、複数のテーブルを配置する事で気の合った人同士で過ごせるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室に置く物はすべて持ち込んでもらっている。家族と本人を中心に配置を決めてもらい、できるだけ住み慣れた環境に近くなるようにしてもらっている。	居室内は施設の備え付けがなく、ベッドや畳、ソファなど家のものを持って来てもらっている。配置も本人と家族で決めており、その人らしい部屋になっている。家族や知人の面会時には1日中利用者と一緒に部屋で過ごすなど、居心地のいい空間となっている。外出用にハンガーにかけられているおしやれや帽子、バッグも多く、日頃からおしやれを楽しんでいる様子が見られる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の身体状況に合わせ、手摺の増設をしたり、手摺付きの椅子に変えたりするなどの工夫をしている。また、利用者からの要望もあり、可能な限り実現している。		